

美術教育における遠隔地を結ぶ取り組みについて（Ⅱ）

中川 泰（長崎大学教育学部）

井手 淑子（長崎県教育センター）

I. はじめに

本研究のコンセプトは、美術教育の領域で教員養成大学における幼大連携あるいは小大連携あるいは中大連携によって、参加する幼稚園・保育所や小学校や中学校の子どもに対して、普段の教育活動をより豊かにする活動、普段の教育活動にはない意味ある活動を保障することにある。また、近い将来に美術教育を指導する教員となる大学生や大学院生に対して、子どもと関わる仕事の魅力ややりがいについて学ぶ場を実現させることにある。

本稿の目的は 2013 年 4 月から 3 年間継続した長崎県・五島列島最北端の島で生活する宇久島の中学生と長崎大学教育学部の大学生との交流から発展した“教育実践（2015 年 12 月）”に関わる記録〔※鑑賞を活かした授業〕を整理し、“小大連携と中大連携をターゲットにした美術教育における遠隔地を結ぶ魅力的なプログラム”を作成するための基礎資料とすることにある。

II. 交流から発展した教育実践（2015 年 12 月）

井手淑子が前任校の佐世保市立宇久中学校で実施した記録である。宇久中学校は全校生徒 33 名という小規模校である。生徒が素直で真面目な反面、積極的に自己表現をしないことから、全校で表現力の向上を課題として研究に取り組んでいる。第 1 学年は比較的にぎやかで、よく発表する生徒がいる学年である。しかし、表現活動には意欲的に取り組むものの、鑑賞活動では言葉が少なかったり浅い見方で終わったりする生徒が多かった。その原因としては主題を明確に設定できていないことや、鑑賞会における視点の提示が不十分だったことが考えられる。そのため、主題設定を十分に行わせることで生徒の思いを明確にさせ、作品完成後の鑑賞会ではその思いを軸に作品を深く鑑賞する活動を展開させる構想を立案したのである。

題材として採用したのは、彫刻家として著名な藪内佐斗司の「童子シリーズ」である。子どもを表情豊かに表現している作品は、生徒の発想の源泉として大き

な可能性を秘めている。

①題材名：

「ぼく・わたしの〇〇童子をつくろう」(1年 総時数 12時間)

②目 標：

- 彫塑表現に興味・関心を持ち、主体的な活動に取り組む(関心・意欲・態度)
- 参考作品から想像したイメージや、日ごろの経験で感じたことなどを基に、主題を生み出すことができる(発想・構想の能力)
- 粘土の特性や用具の特徴を活かしながら、創意工夫して、表したいイメージを立体として表現することができる(技能)
- お互いの作品のよさ、作者の心情を感じ取り、伝え合うことができる(鑑賞の能力)

③導 入：

1時間目に作品鑑賞を行った。鑑賞するものは藪内佐斗司の童子シリーズの作品写真である。これは長崎大学の大学生が作成したものである。めくると、その童子のポーズや表情を大学生が真似して別の解釈をした写真が現れる二重構造になっている。生徒に対して、まず、表の童子シリーズの作品のみを見せ、どんな場面なのかを想像させた。その後、大学生の写真を紹介しながら、生徒たちにも童子のポーズや表情を真似して撮らせ、発している言葉や題名を考えさせ、班ごとに発表させた。生徒は体を動かして行う初めての鑑賞を楽しみながら行った。ポーズや表情を真似ることを恥ずかしがる生徒が多かったが、それぞれが本人たちなりの言葉で、童子の発しているだろう言葉を想像しながら、主題について考えを深めていた。教師は発表の際にどうしてそう思ったのか理由を聞きながら、ポーズや表情に注目させた。

次時は表情への注目が浅かったという反省から、再度童子シリーズの作品で喜怒哀楽に分けられそうな写真を4枚見せ、その表情の違いや面白さに着目させるための鑑賞会を行った。その後、「自分だったら何童子を作りますか」と投げ掛け、主題設定へと進めた。主題は分かりやすいように喜怒哀楽で分け、題名まで考えさせた。

④展 開：

作品制作では粘土を用いた。芯材は既に球体となっている時短教材を用いたため、短時間で成形を行い、細部の表現へと進ませることができた。この段階で、完成までの見通しを立てさせることと制作への意欲を喚起させるために、教師が作成した童子を参考作品として提示した。提示する際には、生

徒とやり取りをすることで、生徒が作品から感じたこととその理由を引き出し、作品の見方を深めながら鑑賞させた。

表情を作る際は喜怒哀楽の表情の違いから、目や鼻、口の形に注目させた。また、喜怒哀楽が表現された写真を参考資料として掲示した。さらに、主題を常に意識させ、首の傾きや髪の毛の感じなどを工夫させた。

⑤鑑賞：

生徒たちは作りながら主題を深めたり変更を加えたりしていた。そこで、早くできた生徒から作品についてより詳しくワークシートに記述させ、本時の準備物とさせた。ワークシートには、テーマが喜怒哀楽のどれにあたるのかと、作品の題名、童子の表情の理由など、細かい設定を記入するところを設けた。これは、鑑賞会において作品を説明するための資料となる。このワークシートを最初の主題設定の場面で書かせていれば、作品にさらなる深まりが出たのではないかと悔やまれる。

まず、班ごとの鑑賞会を設定した。一般的な鑑賞会は作者が作品について紹介することが多いと考えられる。ここで充実した鑑賞会が行われるように工夫した点は、推理形式にして根拠を明確にした言語活動を行わせたことである。作品は各班1点ずつを鑑賞する。机上にはその作品のみである。これは他に目が行かないよう集中させるためである。鑑賞者は作品だけを見て、その主題や工夫した点を推理し発表する。作者は明確な答えを言わず、鑑賞者に対して「どうしてそう思ったの？」と根拠を問う。そうすることで、発言を求められた鑑賞者の生徒は自分の考えを深め、作者も具体的な感想を得ることができる。ここで押さえなければならぬのは、鑑賞者が推理を外す可能性があるということと、それは価値のあることだということである。しかし、生徒はそれに気づくことはできず、不正解の場合に自信をなくす生徒もいると考えた。そこで、鑑賞会を始める前に、次の点を押さえた。

- （鑑賞者の）予想が当たった＝鑑賞者の観察力・想像力がすばらしい
- （作者が）予想を当てられた＝表現の工夫がすばらしく、主題をよく表すことができている
- 予想が当たらなかった＝様々な見方ができる作品である

以上のように生徒へ説明をすることで、自分の意見を発表することに自信を持てるよう、様々な意見を認め合うよう促した。

実際に行った様子を観察したところ、「どうして？」という問いに対してうまく答えられない生徒もいたようだが、ほとんどの生徒が作品の細部までよ

く見て、自分なりに感じたことを発言しようとしていた。普段、すぐに集中力を切らしてしまう生徒も、作品について思いを巡らしながら友人と意見を交わし合うことに夢中になっていた。鑑賞者の推理の後は、作者がワークシートを基に作品に込めた思いや工夫を発表し、一人分のターンが終わる。そして、次の作品の鑑賞へと移り、それを繰り返しながら、全員の作品を鑑賞させた。最後には全員の作品を一つの大きな机の上に並べ、全体鑑賞をさせた。時間は十分に取れなかったが、生徒は目を輝かせながら完成した作品を見回っていた。

⑥ 考 察：

表現活動において初めての彫塑制作だったが、生徒が導入段階で籾内佐斗司の作品の面白さに惹かれたことで、ほとんど抵抗なく制作に進むことができた。様々な作品を鑑賞したことで興味関心や発想が広がったと考えられる。それまで苦手意識のあった生徒も、意欲的に制作に取り組む姿が見られた。一方で主題設定は喜怒哀楽から、さらに感情を細分化させて考えさせる必要があったと感じた。例えば、同じ喜でもいろいろな喜び方があるはずで、一口に喜怒哀楽と言っても感情の幅は大きい。伝えたい感情を細かく設定させることによって、より明確な主題の設定ができ、造形の工夫も広がり、鑑賞会での伝え合いも深まったのではなかろうか。

鑑賞会において全員が意欲的に取り組めた。しっかり作品を見て、作品の主題やそれに近いものを想像し発言していた。これまでの鑑賞会では「いい」「うまい」などで終わっていた生徒も、工夫点について具体的な記述をすることができていた。自分自身が工夫を重ねたことで、友人が工夫したであろうことを自分の工夫の過程と重ね合わせて想像することができたのではないだろうか。工夫は表現意図の実現のために行うものであり、ここで表現意図を明確にさせたことが効果的だったのではないかと考えられる。授業展開の改善としては、表現活動の途中で工夫点について具体的なキーワードを明確に提示して共有化を図ることで、鑑賞会での話し合いがさらに活発なものになると思われる。

今回、「○○童子」という形で子どもの像を制作させたが、ここで気づいたことは生徒たちが自然と自己を投影して制作をしていることである。主題を設定する時に抱いていた感情をそのまま主題にした生徒もいた。少し大人びていて男子の子どもっぽさを煙たく感じている女子は、すねている童子を作った。いつも楽しくにぎやかに過ごす生徒は、満面の笑みがこぼれそうな童子を作った。全員が自分の感情をそのまま表現しているかは分からないが、一人一人の個性が如実に表れる作品ができたことに驚かされた。これは表情というものを主題に設定したことが大きいのではないかと思われる。今後も生徒が作品づくりに込めた思いを、喜びを持って伝え合い、互いを認め合う

授業づくりを行っていきたい。





Ⅲ. 長崎大学教育学部の大学生との交流（2015年7月）

「交流から発展した教育実践（2015年12月）」の基盤になったのが、以下の“宇久中学校と長崎大学の交流活動 [註1]”である。

①活動名：

「ペットボトルが大変身！アーティストと一緒にみんなで作るお花畑」

②背景：

本活動はこの段階までで2年間余り継続させてきている長崎県・五島列島最北端の島で生活する宇久島の中学生と長崎大学教育学部の大学生との交流の一部である。“2015 宇久島アートフェスティバル”と連動させ、2015年7月に宇久島で、アーティストと小学生と中学生と大学生とのコラボというスタイルで実施した。なお、今回は「公益財団法人日本離島センター・離島人材育成基金助成事業」と「公益財団法人松園尚巳記念財団・地域振興助成事業」の助成を受けている。

③内容：

- 概要：ペットボトルを切って組み合わせ、着色し、花の形をつくる
- 材料・用具：ペットボトル、透明チューブ、針金、ビーズ、ペンチ、はさみ、錐、電気ドリル、マジック、ビニールシート、机、新聞紙など
- 活動時間：2時間

- 参加した子ども：宇久小学校の全学年児童、宇久中学校の全学年生徒
- その他の参加者：佐野祥久（招待アーティスト）、井手淑子（宇久中学校教諭）、長崎大学教育学部の学生・院生・教員 13 名、宇久小学校と宇久中学校の教職員・保護者、ボランティアアーティスト・地域住民の方々多数
- 関連ワークショップ：当日の夕方に、ペットボトルのランタンづくり
- 展示：2015 年 7～8 月、“2015 宇久島アートフェスティバル”の参加作品として、宇久町行政センターのロビーに設置／2015 年 10～11 月、佐世保市主催“させぼ文化マンス”で、アルカス SASEBO 交流スクエアに設置

④総括：

「美術教育における遠隔地を結ぶ取り組み」は多くの問題を孕んでいるものの、小規模校に在籍する子どもや、教員を目指す大学生や、彼らに関わる指導者や地域の住民にとって、優れた学びの場である。現在、長崎大学の中川研究室が起点となって、教育現場で活躍している指導者間をつないでいる。それは子どもを幸せにしようと願う仲間たちと触れ合う場を創造する。ここに大きな意義がある。“遠隔地を結ぶ取り組み”は仲間たちとの出会いを形成し、将来の教育を担う後輩を育てることにつながるのである。

★2015 年 11 月に、中川泰他 17 名が「幼小中大連携による美術教育の検討」を“教育実践と省察のコミュニティ 2015（長崎大学教育学部）”でポスター発表。それに加えて、「図工・美術の先生たちが肩肘を張らずに集まりたい！」を掲げ、5 件のポスター発表（その中の 1 件が『ペットボトルが大変身！アーティストと一緒にみんなで作るお花畑』）。

IV. 鑑賞を活かした授業

宇久中学校は宇久島で唯一の中学校であり、小中高一貫教育の立場から「研究テーマ：夢を育て・夢を実現させる・教育」を訴求し、「研究の視点：自分たちの考え、思い、願いを表現することができたか」は大切なポイントになっている。

交流から発展した教育実践（2015 年 12 月）の対象となった生徒は 13 名（男子 8 名、女子 5 名）と少人数である。

美術科において、鑑賞を活かした授業で重要なことは、表現に裏打ちされた鑑賞を通しつつ、生徒が楽しみながら自己表現力を獲得することである。“生徒作品の鑑賞を通した授業”の教育的意義は、「新たな視点から自分の作品の良さや課題に気づき、より良い作品づくりを行う意欲を喚起する」ことと「生徒のコミュニケーション能力を育成する」ことに集約される。

最後の 12 時間目、「完成した作品を生徒たちが鑑賞し合い、感じ取ったよさを

伝え合う授業」を参観した教員からのコメントをプラスの内容とマイナスの内容に分類して、以下に記載する。

[プラスの内容]

- 自分の思いを説明するための準備で、振り返りのワークシートに線を引く確認作業がよかった
- 作品の完成度が高く、子どもどうしでアイデアを広げあうことができていた
- 教師の参考作品がよかった
- 作品の題材や工夫など、項目を設定して感じたことや気づきをあげていく鑑賞のスタイルが面白かった
- 「どうして？」と聞くことで発言に具体性を持たせることがよかった
- 生徒が主体的に参加しており、非常によかった
- 鑑賞のルールを決め、一人一人が自分の思いや感じたことを表現できていた
- 予想が当たらない時のフォローをしているのがよかった
- 子どもの意見を取り上げていたのがよかった
- 子どもの作品の完成度が高く、アイデアもよかった

[マイナスの内容]

- 求める発言のラインを明確にすることが大切
- “どこから悔しさがくるのか”など、子どもの意見をもっと掘り下げることが必要
- 一部の生徒の発言に照れがあったのが気になった
- “めあて”の提示のタイミングや、導入の流し方に改善の余地がある
- 一番、最初に“めあて”を出し、やることを提示し、グループに分けさせてから、仮想的に導入の鑑賞を進めるとよいのでは…
- 導入の鑑賞で、「これと同じようにしていくよ」と確認しながら、板書にも文カードを提示していけば、鑑賞時のタイミングが分かり易い
- 結果的に時間が足りず、最後の生徒は足早になってしまったので、全員が平等にできるよう、一つの作品に5分などとあらかじめ決めておくとうい
- ワークシートを書くタイミングが不明
- 振り返りを充実させ、どのような意見交換があったのかを共有させることができればよかった

井手淑子は最後の授業について以下のようにコメントしている。

鑑賞会において、作品だけを見て主題や工夫を想像することができた生

徒は、それに見合うだけ自分も工夫してきたから可能であったのではないか。その工夫は、主題をじっくりと考え、明確にしたことが素地になっているように感じている。今回、思いがあってこそその工夫が重要であることを再認識した。

方法論に関係する内容として、次のことを指摘している。

- 発問を「どうして？」を「どこからそう思う？」に変えると生徒が答え易くなるように思う
- ワークシートには工夫の余地があり、今後、さらなる改善の必要性を感じた
- “評価の難しさ”を乗り越えることで、生徒にとって充実感を感じる鑑賞会を実現できるのではなかろうか

V. まとめ

井手淑子の教育実践は、粘土を用いて表情のある人物の顔を表現する彫塑の学習である。粘土は小学校の時から使われている親しみやすい素材であり、手を使って自分の思いを直接的に表現できる面白さがある。題材名になっている「○○童子」というのは、彫刻家・藪内佐斗司の童子をモチーフとしたシリーズを造形表現に取り組む際の“生徒の発想の起点”にしたかったためだとのことである。

藪内佐斗司は大阪に生まれ東京藝術大学で彫刻を学び、古い仏像の制作方法や材料の研究に携わり、母校の大学教員として古い仏像の修復で活躍している。奈良県のマスコットキャラクター「せんとくん」のデザインでブレイク後、全国に多くの作品が設置されている。

遠隔地で活躍する井手淑子と後輩である大学生との交流は積み重ねられる中で藪内佐斗司と浜田知明に絞られ、藪内佐斗司の「童子シリーズ」を核とした遠隔地を結ぶ美術の共同授業を構想することになった。藪内佐斗司に決定した理由は彼の作品が彫刻という心象表現のみならず、「せんとくん」に代表される目的表現としても意味を有することにあつた。

2014年10月から11月まで開催された「企画展 藪内佐斗司 彫刻展～いのちをむすぶ童子たち」（於 島根県立美術館）で中川が収集した資料を大学生へ提供した。

大学生は共同授業の事例として、自分たちで藪内佐斗司の「童子シリーズ」になりきり、写真を撮る活動を構想し、作品サンプル等を多数作成した。2015年7月に開催された“2015 宇久島アートフェスティバル”に参加した時、井手淑子に作品サンプル等を手渡した。大学生は宇久の小学生と中学生と一緒に「ペットボトルが大変身！アーティストと一緒にみんなで作るお花畑」の活動を体験した。その時に中学校1年生であった子どもが、長崎大学教育学部の大学生との交流か

ら発展した“教育実践”を2015年12月に経験している。

現在、これらの成果を基に、美術教育における遠隔地を結ぶ取り組みとして、教材開発をしながら、主に小大連携（中大連携も視野に入れて）に活用する準備を進めている。実際には、藪内佐斗司の作品を活用した教材、浜田知明や新宮晋などの作品を活用した教材を教育現場で試行する段階に近づいてきている。

教材を小大連携と中大連携に限って構想すると、以下のような3種類のプログラムに分類することができる。

(A) <「大学生」が企画した活動>を「子ども」と「教員」が体験するプログラム

(B) <「子ども」と「教員」が企画した活動>を「大学生」が体験するプログラム

(C) <「大学生」と「教員」がコラボレーションした活動>を「子ども」が体験するプログラム

これまでの大学生と井手淑子との交流は(A)に始まり、(C)に続き、(B)へと発展してきたとまとめることもできる。

最後に、第1報で指摘した「美術教育における遠隔地を結ぶ取り組み」のメリット〔註2〕を再考し、改めて以下のように提示する。

- 小規模校に在籍する子どもにとっての優れた学びの場となる
- 子どもが自らの夢を育み、幸せになる貴重なチャンスとなる
- 子どもを幸せにしようと願う仲間たちの貴重な交流の場となる
- 教員を目指す大学生にとっての優れた学びの場となる
- 子どもと大学生に関わる指導者にとっての優れた学びの場となる
- 子どもと大学生に関わる地域の住民にとっての優れた学びの場となる
- 指導者間の仲間たちが出会う最良の場となる
- 将来の教育を担う後輩を育てる最良の場となる
- 大学が起点となり指導者間をつなぐことに貢献できる
- 教員養成に携わる大学が活性化できる

〔註〕

- 1) 中川泰「ペットボトルが大変身！アーティストと一緒にみんなで作るお花畑」『てのことばーあそび、つくる、育ちの日々』(ものづくり教育会議) 2016年, pp. 22-23.
- 2) 中川泰・井手淑子・江口邦裕「美術教育における遠隔地を結ぶ取り組みについて(Ⅰ)」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部) 第15号, 2015年, p. 235.